

お手ごろ プレミアムノートを手に入れる

予算4万円から買える!

パソコンが安くなったとはいえ、3万円前後の格安モデルだと気になる点や不都合な点も目に付く。ところが、もう少し予算を上乘せすれば、がぜん魅力的な“お手ごろプレミアムノート”が手に入る。その魅力と製品選びのポイントについて解説しよう。

文：中村 稔

ここ1年に登場した数あるパソコン製品の中で注目したいのが、高品質かつ10万円未満で買える“お手ごろプレミアムノート”パソコンだ。15.6型液晶や14型液晶を搭載するスタンダードノートでは、日本HPの「Pavilion 15-cu0000」やデルの「Inspiron 14 7000 プレミアム」、13.3型液晶クラスの小型ノートではマウスコンピューター「MB13ESV」

など、該当する製品の数は増えつつある(図1)。

とりわけ、脚光を浴びているのが日本マイクロソフト(以下マイクロソフト)が8月に発売した10型の2in1ノート「Surface Go」。最小構成のモデルで6万円台と割安感がある。従来だと同社製ノートパソコンの発売時における価格はいずれのモデルも10万円以上していただけに、低価

格モデルの登場は期待を抱かせる。

現在、店頭やネットショップなどで人気を占めるパソコンは、10万円以上の売れ筋スタンダードノートと、5万円未満の格安スタンダードノートの2種類だ(図2)。しかしながら、今どきの消費者感覚からすると、ネットの利用が主な用途であれば、パソコンに10万円以上の金額を出すのは少々抵抗感がある。一方で、一般的な格安ノートだとコスト削減によるチープ感が否めない。安いとはいえ、オーナーとして所有欲を満たしたいと思うのは人情だろう。そうした「価格は手ごろでも品質が高いものを」という消費者の欲求を的確に捉えているのが「高品質・低価格」のお手ごろプレミアムノートだ。

液晶品質や性能に優れる

今回、お手ごろプレミアムノートと称して取り上げた製品の特徴は主に3つある。

一つは液晶ディスプレイの表示品質が高いこと(図3)。日本HPとデル、マウスコンピューターの各モデルはいずれもフルHD(1920×1080ドット)の液晶を搭載。マイクロソフトのモデルは、3:2比率の1800×1200ドットの液晶を備える。格安

●お手ごろ価格の“プレミアム”製品が続々登場

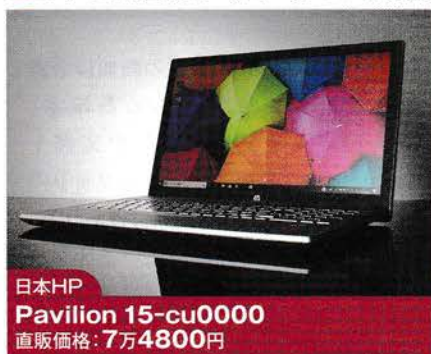


図1 売れ筋ノートと格安ノートの中間価格帯に、コストパフォーマンスに優れた魅力的な製品が次々と登場している

IPS

画面の光を透過させたり遮断させたりする液晶分子の配置技術。液晶分子の傾きが小さく、視野角による輝度や色の変化が抑えられる。

ノートであれば、WXGA (1366 × 768ドット) クラスの液晶が通常だ。また、日本HPとデルの液晶パネルは視野角の広いIPS方式というのもポイントである。

2つめはデザイン性や質感の高さを備えていること(図4)。デルやマウスコンピューターは、本体素材に一般的な樹脂ではなくアルミニウム合金を使っている。表面の仕上がり具合は10万円以上する上位の製品と比べても遜色ない。日本HPはパーツの継ぎ目を減らした「ユニボディ」を、マイクロソフトは上位モデルをそのままコンパクトにしたデザインを採用した。いずれのモデルも、デザイン性や質感には一定の所有欲を満たせるものがある。

3つめはコストパフォーマンスの高さだ。図5は、日本HPと代表的な売れ筋ノートで仕様を比べたもの。CPUの種類やメモリーの容量といった仕様は、日本HPが上回っている。日本HPの場合、光学ドライブの種類やOfficeソフトなど付属ソフトの充実度といった点を差し引いて考える必要があるが、15.6型や14型のスタンダードノートクラスであれば、お手軽プレミアムノートの性能は十分満足できるものだろう。また、日本HPとマウスコンピューター、マイクロソフトの3モデルは、USB Type-C端子も搭載する。

以降のページからは、お手ごろプレミアムノートパソコンを選ぶ際の悩みどころや買い方のポイントなどを取り上げて解説する。後半のページでは、本パートで紹介した4製品の実機レビューも掲載したので参考にしてほしい。

●7万円台前後で価格帯を形成

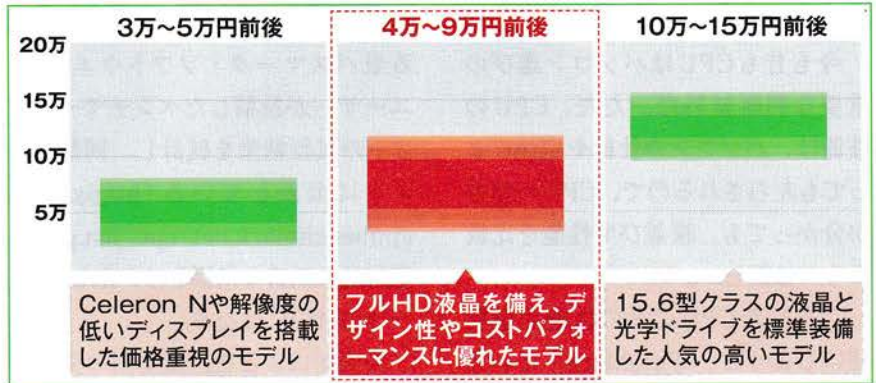


図2 お手ごろプレミアムノートの価格帯は4万円から9万円前後で、中心価格帯は7万円前後。売れ筋製品より安く、格安製品よりも高性能だ

●お手ごろプレミアムノートの魅力とは

液晶は高解像度できれい



図3 今回紹介する製品はいずれもフルHDか、それとほぼ同等の解像度を持つ液晶を搭載する。視野角の広いIPS方式の液晶を採用したモデルもある

所有する喜びを得られるデザイン性

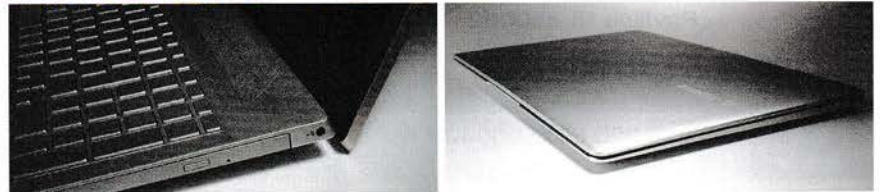


図4 価格が手ごろにもかかわらず、いずれの製品も質感やデザイン性に優れている。格安製品にある作りのチープさはほとんどない

コストパフォーマンスが高い

※最小構成時の直販価格(送料別)

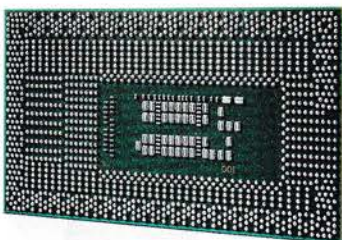
	お手ごろプレミアムノート	売れ筋スタンダードノート
メーカー	日本HP	富士通
製品名	Pavilion 15-cu0000	FMV LIFEBOOK AH45/C2
実勢価格	7万4800円*	約14万8000円
ディスプレイ(解像度)	15.6型液晶(1920×1080ドット)	15.6型液晶(1920×1080ドット)
CPU	Core i5-8250U	Core i3-7020U
メモリー	8GB	4GB
ストレージ	1TB HDD	1TB HDD
光学ドライブ	DVD±RW	ブルーレイドライブ(BDXL)
Officeソフト	なし	あり

図5 15.6型クラスのお手ごろプレミアムノートのハードウェア仕様は高い。一方で、売れ筋ノートは、Officeソフトを含めた付属ソフトが充実している

お手ごろプレミアムノートのCPU性能は？

今も昔もCPUはパソコン選びの重要な判断材料だ。ただ、CPUの性能は、パソコンの仕様や環境によっても左右されるので、CPUの型番が分かっても、横並びで性能を比較するのは難しい。

こうしたCPUごとの性能差を明確にしようと、「PassMark」というベンチマークソフトの開発を手掛け



一部の製品はインテル製で最新の第8世代CPUを搭載する。第7世代に比べて性能が向上したという

る豪パスマーク・ソフトウェアは、ユーザーが投稿したベンチマークソフトの実行結果を統計し、同社のサイトに公表している (https://m.cpubenchmark.net/cpu_list.php)。絶対的に正確な指標とはいえないが、一つの目安にはなる。

公表値によると、富士通の売れ筋モデルが搭載する「Core i3-7020U」は「3589」。一般に、売れ筋モデルは、Officeソフトやネットの利用といった通常の用途で性能に不足が生じないように設計されている。CPU性能が高いか低いかは、この数値を基準にして判断するとよい。

では、お手ごろプレミアムノートでの性能はどの程度なのか。日本HP

のPavilion 15やデルのInspiron 14が搭載する「Core i5-8250U」の結果は「7678」。売れ筋モデルの2倍以上の高い数値を示していた。

一方、モバイルノートではマイクロソフトのSurface Goが搭載する「Pentium Gold 4415Y」が「2184」、マウスコンピューターのMB13ESVが搭載する「Celeron N3350」は「1112」と振るわない。ただ、同じモバイルノートで東芝の売れ筋モデルであるdynabook RX33は「1913」、ASUS JAPANの格安モデルであるTransBook R105HAは「1273」とそれぞれ同水準だ。性能より消費電力が重視されるモバイルノートとしてみれば、妥当な結果といえる。

スタンダードノート

	モデル名	CPU*1 (定格動作周波数/最大動作周波数*2)	コア/ スレッド	3次 キャッシュ	TDP	PassMark のスコア
お手ごろ プレミアム	Pavilion 15-cu0000	Core i5-8250U (1.6GHz/3.4GHz)	4/8	6MB	15W	7678
売れ筋 モデル	FMV LIFEBOOK AH45/C2 (富士通)	Core i3-7020U (2.3GHz)	2/4	3MB	15W	3589
格安 モデル	ideapad 320 80XS0004JP (レノボ・ジャパン)*3	AMD A10-9620P (2.5GHz/3.4GHz)	4/未公表	2MB	未公表	3748

モバイルノート

	モデル名	CPU*1 (定格動作周波数/最大動作周波数*2)	コア/ スレッド	3次 キャッシュ	TDP	PassMark のスコア
お手ごろ プレミアム	Surface Go	Pentium Gold 4415Y (1.6GHz)	2/4	2MB	6W	2184
お手ごろ プレミアム	MB13ESV	Celeron N3350 (1.1GHz/2.4GHz)	2/2	なし	6W	1112
売れ筋 モデル	dynabook RX33/FB (東芝)*4	Celeron 3865U (1.8GHz)	2/2	2MB	15W	1913
格安 モデル	TransBook R105HA (ASUS JAPAN)*5	Atom x5-Z8350 (1.44GHz/1.92GHz)	4/4	2MB	未公表	1273

- *1=直販モデルは最小構成時のもの
- *2=最大動作周波数はターボ・ブースト、ブースト周波数、ブースト・クロックの値を示す
- *3=15.6型のスタンダードノート、4GBメモリー、500GB HDDの構成で8月下旬時点の直販価格は4万5600円
- *4=13.3型の携帯ノート、4GBメモリー、1TB HDDの構成で8月下旬時点の実勢価格は約9万8000円
- *5=10.1型2in1ノート、4GBメモリー、64GB eMMCの構成で8月下旬時点の実勢価格は約3万4000円

「PassMark」の数値は、米パスマーク・ソフトウェアが公表している8月下旬時点におけるCPU性能の指標。同社のベンチマークソフトを実行したユーザーから投稿された結果を統計したもの。CPU処理性能の大まかな目安になる。数値が高いほど高性能

プロセッサ・ナンバー▼
米インテルが2004年に導入したCPU製品ごとの性能を示す数字のこと。モデルによっては機能を示すアルファベットを組み合わせたものもある。

M.2▼
ノートパソコンなどに組み込む小型の拡張カード規格。PCI ExpressやUSB 3.0、Serial ATAといった信号を利用可能。2013年12月に公開された。

CPUのブランドはどう見分ける？

パソコンの仕様を調べる際、苦労するのがCPUの種類の高さ。ここでは、CPU表記の見方を解説する。

まず最初に確認したいのはCPUの登場時期。米インテルの場合、**プロセッサ・ナンバー**の先頭の番号が「8」なら最新の第8世代、「7」なら第7世代となる（下位を除く）。米AMDの場合は、Ryzenが最新世代、それ以外は旧世代と判別しよう。

ブランドごとの等級は、インテルは「Core i7」「同i5」「同i3」「Pentium」「Celeron」、AMDは「Ryzen 7」「同5」「同3」の順に位が下がっていく。AMDの場合、第7世代ではブランド名称が異なり、「FX」「A12」「A10」「A9」「A6」の順となっている。FX以外は数字が小さいものほど下位と考えればよい。

インテルは低消費電力端末向けCPUのブランドも持つ。「Celeron N」と「Atom」の基本設計がほぼ同一であることと、プロセッサ・ナンバーが大きいものほど上位になるという点を知っておけばOKだ。

モバイル向けCPUのグレードと世代の対応

	グレード	インテル	AMD
第8世代	上	Core i7-8000番台	Ryzen 7 2700番台
	下	Core i5-8000番台	Ryzen 5 2500番台
		Core i3-8000番台	Ryzen 3 2300番台、2200番台
第7世代	上	Core i7-7000番台	FX-9800番台
	下	Core i5-7000番台	A12-9700番台
		Core i3-7000番台	A10-9600番台
		Pentium 4410番台	A9-9400番台
		Celeron 3960番台、3860番台	A6-9200番台

各世代におけるCPUのグレード。インテルとAMDは、グレードごとにCPUのブランドをそれぞれ設けている

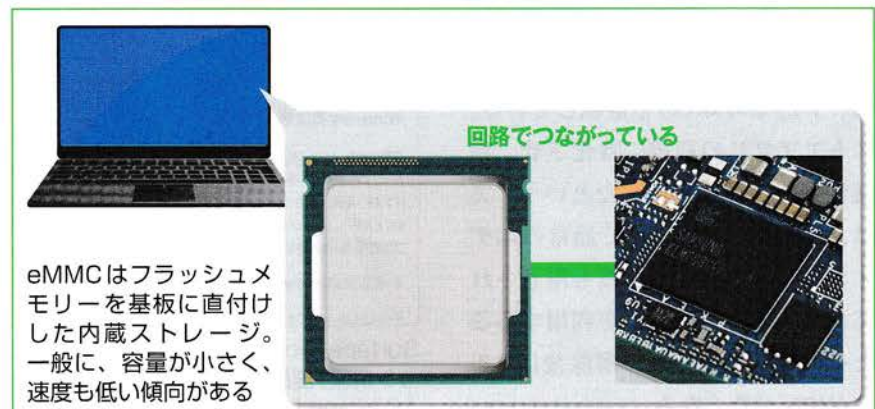
低消費電力端末向けのインテル製CPUのグレードと世代の対応

	グレード	インテル	搭載対象
第6世代	上位	Celeron N4100	低消費電力 ノートパソコン
	下位	Celeron N4000	
第5世代	上位	Celeron N3400番台	低消費電力 ノートパソコン
	下位	Celeron N3300番台	
第4世代	上位	Celeron N3100番台	低消費電力 ノートパソコン
	下位	Celeron N3000番台	
	中位	Atom x7 Z8700番台	タブレット
	下位	Atom x5 Z8300番台	

インテルは低消費電力向けCPUにもブランドを設けている。Celeron NとAtomは基本的に同じアーキテクチャーだ

eMMCのストレージって高性能なの？

2in1ノートなどモバイルノートでは「eMMC」と呼ぶ、組み込み向けフラッシュメモリー媒体を搭載するモデルがある。インタフェースの仕様がメモリーカードをベースにしており、SSDを接続するSATAやM.2といったインタフェースに比べると、転送速度の面で劣る傾向にある。また、基板に直接はんだ付けされているので、アップグレードも不可能だ。



必要なメモリー容量は4GB? 8GB?

Windowsには仮想メモリーの仕組みがあり、メインメモリーの空き容量が不足すると、使われていないデータを内蔵ストレージに移す。内蔵ストレージは、物理メモリーのDRAMよりも速度が低いので、メモリーの空き容量が減ると全体のパフォーマンスに影響しやすい。これはHDDでもSSDでも同様だ。

直販パソコンでは、同一機種でもメモリー容量が4GBのモデルと8GBのモデルを別々に用意していることが多い。当然、4GBを選んだ方が価格は抑えられるが、パフォーマンスの低下が気になるところだ。

そこで編集部では、Core i5を搭載するノートパソコンを使って、メモリー容量の違いによるパフォーマンスの変化を検証してみた。今回取り上げた4製品ではないが、どの機種でも傾向はほぼ同様だろう。

まず、パソコンの電源を投入してからWindowsのデスクトップが表示されるまでの時間を測ったところ、4GBで30秒、8GBで29秒と差が見ら

れなかった。Windowsの高速スタートアップ機能により、起動プロセスが最適化されたためと推察される。

そこで次は、Webブラウザーでタブを20枚開き、タスクマネージャーでメモリー使用率を調べてみた。一

般に、メモリー使用率は80%前後になると処理速度に影響が出やすいとされる。結果は、4GBで92%、8GBで50%と大きな開きがあった。やはり、メモリー容量は大きい方が何かと使い勝手が良くなる。



Pavilion 15の底面。ユーザーが内部基板にアクセスできるような開口部は見当たらない。仕様表でもメモリー増設は不可となっている



※1 電源投入からデスクトップが表示されるまでの時間を5回計測して平均を求めたもの
 ※2 「Chrome」でGoogle マップのページをタブで20枚開いたときに、タスクマネージャーに表示されたメモリーの最大使用率

Core i5を搭載したノートパソコンで、メモリー容量を標準の4GBから8GBに増設したときの性能差を検証した。Windowsの起動時間では、メモリー容量による違いは誤差の範囲だった。一方、Webブラウザーのタブを20枚開いたときのメモリー使用率は、4GBで92%に達したのに対し、8GBでは50%と余裕が大きい

2in1PCに多い「Windows 10(Sモード)」って何?

マイクロソフトのSurface Goなど一部の小型モデルは、「Windows (Sモード)」と呼ぶOSを搭載している。ストアアプリの利用に特化させ、高速性と安全性を両立したという。実は、Sモードを解除して通常のエディションに変更する手段も用意されており、通常のアプリを利用することも可能だ。ただし、解除後はSモードに戻せなくなる。



Surface Goで「設定」アプリの「バージョン情報」画面を開くとOSが「Windows 10 Home in S mode」と表記される



通常のWindowsアプリをインストールしようすると、上のようなダイアログが表示されて処理が強制終了する

USB Power Delivery(PD)▼
Type-Cケーブル1本でUSB機器に最大20V×5A=100Wの電力を供給できるようにした規格。機器同士で給電側と充電側を切り替える機能もある。

オルタネートモード▼
Type-CケーブルでUSB以外の信号も扱えるようにする機能。対応機器同士であれば、ThunderboltのデータやDisplayPortの信号などを転送できる。

Type-Cがあると何が便利なの?

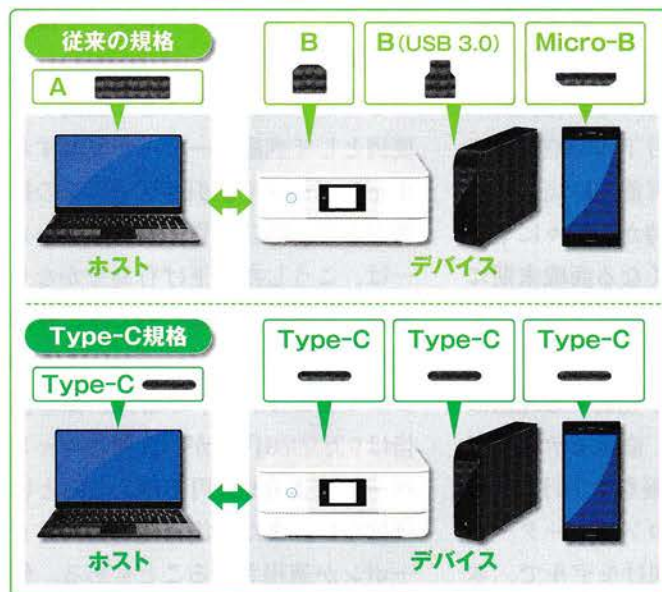
最近、USBのType-C端子を搭載するモデルが増えており、低価格モデルにも波及している。

Type-Cのメリットは3つ。1つめは、周辺機器側の端子が統一されること。従来だとB型と呼ぶ3種類の端子形状があり、機器ごとに適合するケーブルをつなぐ必要がある。Type-C機器同士なら1種類で済む。

2つめは、電力供給能力が3倍以上に上がり、Type-C機器への充電時間は格段に短くなる点。一部のパソコンは電力拡張規格である**USB Power Delivery (PD)**にも対応し、USB PD規格に準拠したACアダプターで給電できるようになっている。

3つめはType-Cの多機能さだ。Type-C端子は「**オルタネートモード**」と呼ぶ仕様により、USB機器やACアダプターの接続に加えて、ディスプレイの映像入出力端子としての機能も持てるようになっている。

ただし、USB PDやオルタネートモードはパソコンごとに対応が異なる。メーカーに確認しよう。



Type-Cが登場する前のUSB機器だと、接続先ごとに端子形状が異なるが、Type-C機器同士であれば1種類で済む

	最大供給電力 (W)
USB 2.0	2.5W
USB 3.0	4.5W
Type-C	15W
Type-C (USB PD)	100W



Type-Cの電力供給量は、USB 3.0の3倍以上となる15Wと大きい。さらにUSB Power Delivery (PD) 規格に対応していれば最大100Wに達する

マウスコンピューター「MB13ESV」に付属するType-C用のハブ。Type-C機器の接続のほか、電源供給やHDMI映像の出力が可能だ

リカバリーメディアは購入した方がよい?

通常、直販モデルではリカバリーメディアは別売だ。Windows 10では、出荷時の状態が特定の領域にリカバリーデータとして保存されており、標準の「回復」機能で、復元やメディアへの書き出しができるようになっている。ただし、プリインストールソフトの復元にリカバリーメディアが必要なケースもある。不安ならメーカーに確認しよう。



通常、ディスクの管理画面を開くとリカバリーデータのあった領域を確認できる。設定アプリの「更新とセキュリティ」→「回復」の「このPCを初期状態に戻す」にある「開始する」をクリックすると出荷時の状態に戻せる

Webに掲載されている価格より安くなることが多い?

パソコンの販売価格は販売時期によって常に上下する。今回掲載したパソコンの実勢価格や直販価格は、いずれも2018年8月下旬時点のもので、変動している可能性は高い。一般に、価格は発売時から徐々に下がるが、在庫が少なくなる商戦末期になるとかえって値上がりするケースもある。

実際の購入価格が変動する理由はそれだけではない。直販モデルは配送料がかかる。今回取り上げた4製品のうち、マウスコンピューターを除く3製品が直販向けモデルで、本体価格に3000円の配送料が上乗せ

される。一方、マイクロソフトは送料無料だ。

もう一つ、価格が大きく変動する要因として直販メーカーが実施するキャンペーンや値引きクーポンの提供がある。特に外資系の直販メーカーは、こうした値下げ行為をかなり頻繁に実施している。例えば、今回取り上げたデルの「Inspiron 14 7000 プレミアムモデル」の場合、標準価格は9万9980円だが、実際はキャンペーンにより9万円を超えることはほぼない。また、決済時に値引きクーポンが適用されることもある。値下げ幅は時期により異なり、週末や

年度末などは値引き額が大きくなる傾向が強い。

こうした大幅な値引きを狙って販売タイミングをうかがうのも購入テクニックの一つではある。ただ、在庫状況には注意したい。ここ数年は、各メーカーとも余剰在庫による価格低下を避けるために、在庫の適正化を進めている。人気のあるモデルだと、通常よりも早く販売終了になるケースが目立つ。あまり買うタイミングを引き延ばすと、目当てのモデルを買い逃してしまう恐れがある。欲しいときに買い時と捉え、素早く決断することも時には重要だ。

1 セット	
構成価格	
価格(税抜)	¥74,800
配送料	¥3,000
小計	¥77,800
消費税	¥6,224
税込合計金額	¥84,024

主要メーカーの配送料	
デル、日本HP、マウスコンピューター	3000円
ASUS JAPAN	700円
日本マイクロソフト、レノボ・ジャパン	無料



デルや日本HPなど主要なパソコンメーカー直販サイトでは、配送料がかかる。料金は3000円前後が相場だ

大半の直販サイトでは標準価格から一定額を割引くキャンペーンを実施している

個人が法人モデルを選ぶのはNG?

直販メーカーの多くは、法人向けのモデルも展開している。表向きは企業などが対象だが、個人事業主として個人で購入することも可能だ。

仕様面は、法人向けモデルと個人向けモデルに明確な差はない。最も大きな違いは保守の部分だ。個人向けのモデルだと保証期間は1年間が通常だが、何年も使われ続ける傾向にある法人向けモデルでは、個人向

けよりも内容が充実した延長サポートを用意している場合が多い。

また、個人向けパソコンには必ずリサイクルマークがあり、価格にリサイクル費用が含まれているが、法人向けパソコンの場合、費用を処分時に負担することになっているため、リサイクルマークが付いていないものが大半だ。その分だけ、パソコンの価格は安くなる。



大手のパソコンメーカーは直販サイトで法人向けモデルも手掛けていることが多い。通常は個人でも購入可能だ

2003年10月から実施されたPCリサイクルの仕組みに基づき、個人向けパソコンに貼られるマーク。価格にリサイクル費用が含まれていることを示す。

長期保証は入った方が安心?

メーカーが付ける製品保証期間は通常1年間。その期間であれば、無料の修理サービスや技術サポートを受けられる。一部のメーカーは、故障した部分の交換部品を送付する「パーツ保証」も提供している。

大抵は、何事もなく使い続けられるものだが、故障するリスクは常にある。ここ数年でパソコンの価格は安くなったとはいえ、数万円も出費したのだから長く使い続けたいと考えるのは当然だ。

多くの直販メーカーでは、標準保証が切れた後も無料の修理サービスが受けられる延長保証サービスも提供し、購入時にオプションとして選べるようになっている。加入費用は、1万円から2万円前後が相場だ。延長保証サービスの適用期間は、標準保証が終了して1年から2年としているメーカーが多い。日本HPやデルの場合、ユーザー宅に専門員が訪れる出張サービスが利用可能。マイクロソフトは落下や水濡れといった自然故障以外の修理にも対応するなど、保証内容はメーカーやサービスごとに異なる。

店頭で購入するモデルの場合は、販売店独自の延長保証サービスを利用する手もある。サービスの加入は、購入金額の5%を店舗のポイントか現金で支払うケースが大半だ。

いずれのサービスも保証限度額が設けられている。通常は、修理費用が購入金額を超えた部分の金額は自己負担となる。また、店舗の延長保証サービスは、年数を重ねるごとに保証限度額が下がるものが多い。

日本HP	デル	日本マイクロソフト
製品保証期間 購入日から1年	製品保証期間 購入日から1年	製品保証期間 購入日から1年
電話やオンラインによる 無料の技術サポート期限 1年	電話やオンラインによる 無料の技術サポート期限 1年	電話やオンラインによる 無料の技術サポート期限 90日*
パーツ保証 1年	パーツ保証 1年	パーツ保証 なし

※対象はプリインストールされているソフトウェア

通常、どの製品でも購入から1年間の標準保証が付く。メーカーごとに差が生じやすいのは、故障箇所の部品を無料提供する「パーツ保証」や技術サポートの部分だ

日本HP	デル	日本マイクロソフト
延長サポートの サービス名称 HP Care Pack ハードウェアオンサイト 翌日対応 3年 ノートブックF用	延長サポートの サービス名称 3年間 Premium Support	延長サポートの サービス名称 Microsoft Complete for Surface
料金 2万1600円*1	料金 1万5000円*2	料金 1万800円*3
保証延長期間 2年	保証延長期間 2年	保証延長期間 1年
技術サポート延長期間 2年	技術サポート延長期間 2年	技術サポート延長期間 約2年
出張修理サービス あり	出張修理サービス あり	出張修理サービス なし
自然故障以外の保証 なし	自然故障以外の保証 なし	自然故障以外の保証 落下、水濡れ
無料修理対応回数 制限なし*4	無料修理対応回数 制限なし*4	無料修理対応回数 2回まで*5

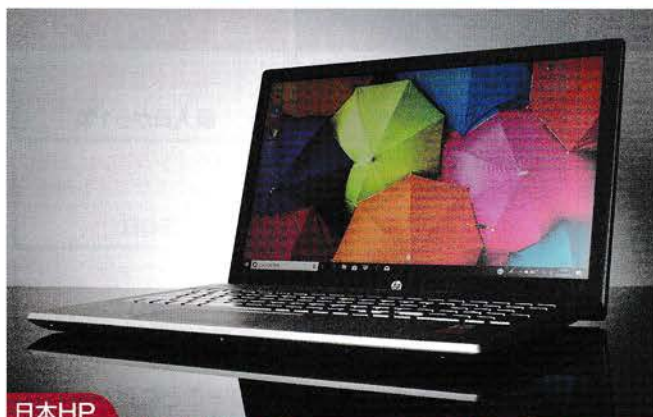
※1 Pavilion 15 cu-0000の場合 ※2 Inspiron 14 7000 プレミアムの場合 ※3 Surface Goの場合
※4 修理費用が購入金額に達すると終了 ※5 免責額は1回につき5400円

メーカーでは標準保証の期間を延長する延長保証サービスも用意する。上の表は2年延長サービスのもの。各社で保証適用範囲や料金が異なる

	ビックカメラ	ヤマダ電機	ヨドバシカメラ
サービス名称	ビック長期保証	家電保	ゴールドポイントワランティ
延長保証期間	2年	3年	4年
料金	購入金額の5%分のポイント(ヤマダ電機は現金払い可)		
保証限度額	修理費用が購入金額の80%を上回る場合は代替品を提供して保証終了	2年目まで修理費用の全額、3年目は50%	1年目は購入金額の80%、2年目は70%、3年目は60%、4年目は50%

店頭モデルの場合、店舗が提供する長期保証サービスを利用するのが一般的だ。購入金額の5%をポイントで支払うケースが多い

実機検証1 | 15.6型 vs 14型、買うならどっち？



日本HP
Pavilion 15-cu0000
直販価格: 7万4800円

- ディスプレイ: 15.6型IPS液晶(1920×1080ドット)
- CPU: Core i5-8250U(1.6GHz)
- メモリー: 8GB ■ストレージ: 1TB HDD
- 光学ドライブ: DVD±RW
- OS: Windows 10 Home(64ビット) ■重さ: 2.07kg



デル
Inspiron 14 7000 プレミアム
直販価格: 9万9980円

- ディスプレイ: 14型IPS液晶(1920×1080ドット)
- CPU: Core i5-8250U(1.6GHz)
- メモリー: 8GB ■ストレージ: 256GB SSD
- 光学ドライブ: なし
- OS: Windows 10 Home(64ビット) ■重さ: 1.649kg

●表示が大きくて見やすいHP、すっきり見えるデル



同一のWebページを表示させて表示の実サイズを比べた。同じスタンダードノートとはいえ、やはり15.6型のHPの方が14型のデルよりも表示サイズが若干大きい。ただ、デルは狭額縁液晶を採用しており、単体で見ると画面サイズが実際よりも大きく感じる

●質感の高さはデルに軍配



デルは天板表面にアルミ素材、天板内部にマグネシウム合金を採用しており、質感が高くしっかりした作り。HPもデザイン性は高いが、堅牢性の部分で価格の差が多少表れているように感じた

今回、取り上げた製品の中で、スタンダードノートは、日本HPの15.6型モデル「Pavilion 15-cu0000」とデルの14型モデル「Inspiron 14 7000 プレミアム」の2製品になる。同じスタンダードノートでも、15.6型モデルと14型モデルでは特徴や利点が異なる。

まずは作業効率に直結する画面表示から見ていこう。どちらもIPS方式の液晶を搭載しており、視野角による色の変化は小さい。文字が大きく見えるのはやはり15.6型のHPだ。一方、デルは狭額縁液晶による錯覚か、実際の画面サイズよりも大きく感じる。ただ、狭額縁の特性なのか、若干ではあるが画面周辺に暗さを覚える。この部分は個人の感覚で評価が分かれそうだ。

デザイン性や質感の高さは、お手ごろプレミアムノートの特徴といえる。特にデルは表面にアルミニウム

●HPはテンキーを備える



HPは15.6型液晶を搭載しているため、テンキーを装備するなどキーボードレイアウトはデスクトップのものと近い。好みが変われそうなのが、デルの[Backspace]キーと[¥]キーのサイズが変則的な点と、HPの[Ctrl]キーや[Alt]キーといった修飾キーの幅がやや短い点だ

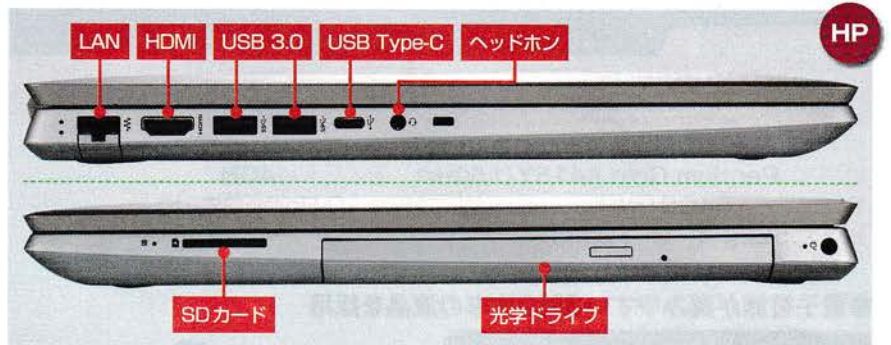
合金、内部にマグネシウム合金の素材をそれぞれ利用しており、本体に剛性感がある。それでいて本体の重さは1.649kgに抑えている。HPは、本体のエッジ部分に傾斜を取り入れるなどスマートな印象があるが、天板の素材が樹脂という点でほんの少しだけ高級感を損ねている。

入力速度を左右するキーボードは、15.6型のHPの方がレイアウトに余裕がある。ただし、[Ctrl]や[Alt]といった修飾キーの幅が全体的に狭い。デルの方も[Backspace]と[¥]のキーが狭い間隔で隣接している。ここも好みが変われる部分だろう。

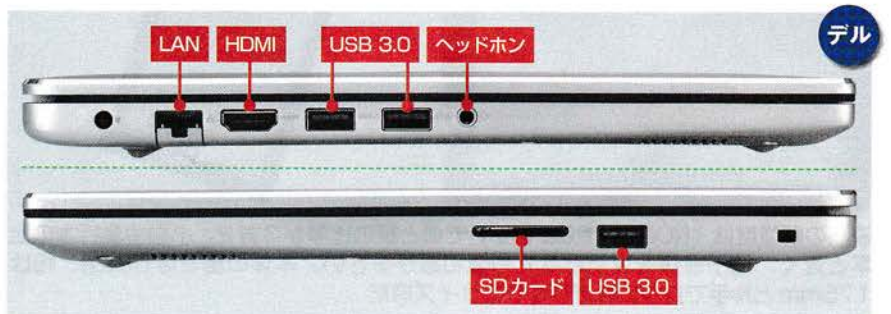
インターフェースの種類や数はほぼ同等だ。あえて挙げると、Type-C端子を備えるHP、USB端子が左右にあるデル、という部分がそれぞれの評価のポイントになる。

15.6型のHPは、そのサイズを生かした表示の見やすさやキー入力のしやすさで分がある。一方、デルは狭額縁液晶や本体の質感といったデザイン性が優れる。なお、どちらも上位モデルがあり、価格も10万円から11万円前後とCore i7搭載の高性能モデルとしては割安だ。検討対象の一つに加えてもよいだろう。

●HPはType-C、デルはUSBを左右に搭載



一般的な15.6型スタンダードノートと同様、インターフェースは豊富だ。なお、Type-CはUSB PDに非対応



左側面に本体の電源をオフにしたままスマートフォンなどを充電できるUSB端子を1つ備えている。USB端子を左右に備えているのもポイントだ

●10万円を出せば上位モデルも狙える

Pavilion 15-cu0000の上位モデル

- CPU: Core i7-8550U (1.8GHz)
- メモリー: 8GB
- ストレージ: 128GB SSD+1TB HDD
- グラフィックス: AMD Radeon 530
- OS: Windows 10 Home (64ビット)
- 価格: 直販価格 10万1000円

Inspiron 14 7000の上位モデル

- CPU: Core i7-8550U (1.8GHz)
- メモリー: 8GB
- ストレージ: 128GB SSD+1TB HDD
- グラフィックス: GeForce MX150
- OS: Windows 10 Home (64ビット)
- 価格: 直販価格 11万4980円

10万円前後の予算があればCore i7を搭載する上位モデルが入手可能になる。仕様はハイエンドモデルに匹敵する

実機検証2 | 話題の2in1ノートは実用に堪えるのか?



日本マイクロソフト

Surface Go (64GBストレージモデル)

直販価格: 6万4800円

- ディスプレイ: 10型液晶(1800×1200ドット)
- CPU: Pentium Gold 4415Y(1.6GHz) ■メモリー: 4GB
- ストレージ: 64GB(eMMC) ■OS: Windows 10 Home(Sモード)
- 重さ: 522g(キーボードは除く)

●電子書籍が読みやすい3対2比率の液晶を採用



液晶の解像度は1800×1200ドットで横と縦の比率が3対2。小説や単行本の比率と近く、電子書籍を表示させても違和感が小さい。本体の重さは522g、幅は175mmと片手で持つにはぎりぎりのサイズ感だ

●専用キーボードは別売



保護カバーと一体化した専用キーボードは別売(価格1万1800円)。本体の背面は一部がせり出すようになっていてスタンドになる

「Surface Go」は、10型液晶を搭載した2in1ノート。従来のモデルは12.5型以上の液晶を搭載していたが、Surface Goはよりコンパクトになって価格を下げたモデルだ。

どうしても廉価版という印象を抱きやすいが、全体的な作りは堅くしっかりしておりチープ感はない。液晶も1800×1200ドットと高解像度だ。それでいて本体は522gに抑えられ、タブレット単体としても現実的なサイズにまとまっている。

標準でOfficeソフトが入っているので、外出先でも自宅や職場の作業を続けられるのは魅力だ。液晶ディスプレイの横と縦の比率が3:2という点もポイント。一般的な書籍の比率と同じなので、電子書籍の表示サイズとほぼマッチする。

キーボードも装着が簡単で、小型ながら入力しやすい。ただし、キーボードは別売だ。本体と同時に購入すると金額は8万円近くになる。キーボードは保護カバーの代わりにもなるので必須といえるが、割安感が薄まってしまうのは否めない。

一般的なノートパソコンとして捉えたと実用度はやや乏しい。液晶の表示が細かいのでWindowsで表示倍率を上げないと、長時間の作業は目の疲労が激しくなる。加えて、タブレットとしても片手で持つにはぎりぎりのサイズだ。作業が長時間に及ぶと重さで支えきれなくなる。ある程度の割り切りが必要だ。

なお、8GBのメモリーと128GBのSSDを搭載した上位モデル(直販価格8万4800円)もある。

実機検証3 | 格安モバイルノートの買い得度は？

「MB13ESV」は、店頭売りのモバイルノート。13.3型の液晶を搭載し、重さ1.3kgと携帯性を重視したモデルとなっている。

同社の従来モデルと大きく異なるのが本体の質感だ。本体全面にアルミ素材を使い、大手メーカーの上位モデルの風貌さえ漂う。それでいて実勢価格は4万円前後と安い。

機能類も豊富だ。USB PDに対応するType-C端子とACアダプターが付属する。本体にはType-C端子が1つしかないが、付属のType-CハブでHDMIとUSB 3.0を増設できる。さらに、タッチ패드には指紋センサーを備え、Windows Helloによる生体認証が利用可能だ。上位には、サブスクリプション版の「Office Home and Business Premium」が付属するモデル（実勢価格は約6万5000円）もある。

一方で、コスト面の影響を感じるのが仕様面。CPUはAtomベースのCeleron N3350、ストレージは64GBのeMMCと力不足は否めない。セカンドマシンとしての運用が最適だ。



マウスコンピューター

MB13ESV

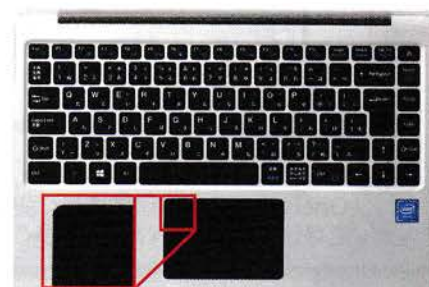
実勢価格：約4万円

- ディスプレイ：13.3型液晶（1920×1080ドット）
- CPU：Celeron N3350（1.1GHz）
- メモリー：4GB
- ストレージ：64GB（eMMC）
- OS：Windows 10 Home（64ビット）
- 重さ：1.3kg

●低価格モデルながら多機能



Type-C端子を備え、付属のUSB PD対応ACアダプターで充電が可能



指紋認証センサーを装備。Windows Helloの生体認証に対応する

まだまだあるお手ごろなプレミアムノート



ASUS JAPAN
ZenBook 14 UX430UA
実勢価格：約9万2000円

13型サイズの本体に14型液晶ディスプレイを搭載したモバイルノート。本体の厚さは15.9mm、重さは1.27kg



日本HP
ENVY 13 x360
直販価格：7万7700円

液晶が回転するコンバーチブルタイプの2in1ノート。本体にアルミニウム合金を使い、重さは1.31kg



レノボ・ジャパン
Yoga Book with Windows
直販価格：6万2739円（税込）

ペン入力に対応する10.1型ノート。液晶はフルHDのIPSタイプ。CPUはAtom x5-Z8550（1.44GHz）